help key

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｈｅｌｐ　ｋｅｙ

【Ｎコード】

Ｎ８１１１Ｋ

【作者名】

ハル

【あらすじ】

女の子とＷｏｒｄのヘルプ機能との短いお話です。

ヘルプ（Ｈ）－　Ｏｆｆｉｃｅアシスタントを表示する（Ｏ）
－　クリック。

ママが買ってくれたばかりのノートパソコン。ＯＳもｏｆｆｉｃｅもリリースされたばかりの最新バージョン搭載機。だけどＷｏｒｄもヘルプも初めてクリックした。だって、いつも家ではブラウザしか開けないのだ。

ｏｆｆｉｃｅに入っているソフトの使い方は学校で教わっている。どっちかって言うと、あたしはＷｏｒｄよりＥｘｃｅｌの方が好き。表計算だってやってくれるし、Ｗｏｒｄみたいに変な改行とか、インデントとか、段落記号とか、頼んでもない動作をすることがないから。

Ｗｏｒｄはきらい。だって変な改行とか、インデントとか、段落記号とか……、１．なんて打って改行しようものなら、２．３．って、頼んでもいないのにどんどんやっちゃう。

だから『拝啓』なんて打とうものなら大変だ。時候の挨拶に続き、何から何まで出してくれちゃって、小学生でもビジネス文書が作れる。おせっかいソフト。きちんと忘れず『敬具』で締めてくれる手厚さが鬱陶しいったらない。

『話したいことがあるので、昼休みに部室まできて下さい』

インクジェット用の便箋はＢ５サイズ。たった一行のメッセージを試し刷りしてみたら、すごく間抜けな見た目。軽く頬杖をつき、なんとか五行ぐらいにならないかと思い悩むことかれこれ三時間。夜も更けて、普段ならぐっすり寝入っている時間だ。

手持ち無沙汰になってヘルプをクリックしてみた。続けて普段は

使うこともないアシスタントをクリック。鳴き声を上げ、軽快な動きでイルカが姿を現した。これもクリック。
ダイアログボックスが出る。オプション（O）。――あ、なんだっけこれ、種類（G）をクリック。
「ああ、アシスタントキャラの選択か。へえ、増えてる」
あたしは頬杖に頭の重みをすっかり預け、ダイアログボックスの中に次々表示されるアシスタントキャラクター達を覗き込んだ。
ちょっと可愛いウイッチを見つけてクリック。
ハロウィンのお化けを紫に塗ったようなだぼだぼのマントの中から細い首が伸び、その先には、そばかすを鼻の頭に撒いた女の子の頭が乗っている。年は小学生ぐらいで、ウイッチ見習いの方がしっくりくる。瞳はマントとおそろいの紫。髪は赤毛。ホウキみたいに毛先がピンと上向いたツインテールだ。
「何悩んでんのさ？　ユッカ」
「へえ、最新版はユーザー名まで読みに行くのか……。しかも喋るんだからすごいなあ」
あたしの呟きを聞いたからか、一度ウイッチはちょこんと首をふった。二束の髪がウサギの耳みたいに揺れる。ウイッチは次に四つん這いになると、打った文字をしげしげと眺めはじめた。ユーザーの目には、ウイッチを真上から見下ろす感じになっていて、画面を這いながら文字を検分するウイッチは、まるで紫のジェリービーンズが蠢いているみたいだ。
「ユッカってロクな文才がないんだねぇ。これ果たし状？　それともラブレター？」
「……ラブレター、……です」
辛口なウイッチの暴言に心が折れたあたしはガクリと机にうつ伏せた。ただでさえ、なけなしの集中力で睡魔と死闘を繰り広げてクタクタだったから、まあ、期待なんてしちゃいなかったけど、常か

ら思う以上に非協力的なＨＥＬＰ機能の態度に、やる気も何もかも放棄して眠ってしまったのだった。
意識を手放すまでのわずかな時間、「あたしがなんとかするしかないわね、こりゃ！」なんて、ウィッチのこましゃくれた声が聞こえたように思って何をする気かと瞼を上げかけたけれど、額にみっしりと海綿を詰め込まれたような眠気に負けたあたしは疑問を口にするまもなく眠りの海の中に沈んでいった。

どのくらい眠っていたのだろう。夢と現を行き来する頭の中に、どこからか音が入ってくる。まるでトランプの軍隊が行進しているような、軽くて規則正しいリズム。
あたしは枕代わりにした腕に顔をこすり付けながら音の正体を考えた。
足の上に何か羽のようなものが触れ、あたしの意識を現の方へと浮上させる。枕にしていた腕から頭をずらせると、ひざの上にはびっちりと文字の打ち出された便箋。

拝啓

桜花爛漫の候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。
唐突にお手紙を差し上げるご無礼をどうかお許しください。私事で大変恐縮ではございますが、折り入ってお伝えしたいことがございます。つきましては、大変ご足労ではございますが、本日昼休み、部室までお運びくださいますようお願いを申し上げる次第でございます。
本来であれば私一人の胸にしまっておくべきが最良と、長きに渉って――

「――……」

あたしはまだどこかが眠ったまま、ぼんやりと便箋の表を見つめた。

その間もカリカリという軽快な足音は続いている。また軽い音が立ち、読みかけていた文字の上に別の便箋が降ってくる。

――お昼休みの件、何卒ご検討の程お願い申し上げます。それではこの辺りにて失礼致します。

何分文章を書きつけない者でございますから、乱文になりましたこと、ご容赦いただければ幸甚でございます。

敬具

『敬具』の文字にはっとして飛び起きると、おびただしい文字の雪崩があたしの部屋を埋め尽くし、パソコンから、自信に溢れたウィッチの笑い声が高らかに響いていた。

（後書き）

この文章はフィクションです。
実際のソフトウェアとは仕様が異なりますことをご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8111k/

help key

2010年10月8日15時24分発行